

## アジア／戦争／新仏教

代表者・司会 大谷栄一  
コメンテータ 岩田文昭

## 近代日本仏教史研究における

## 〈アジア〉と〈戦争〉

大谷 栄 一

本報告では、近代日本仏教史研究における〈アジア〉と〈戦争〉の問題を検討する。私は、以前、東アジア的視点から日本の近代仏教を捉え、かつ、帝国日本の仏教をポストコロニアル的視点から捉え返すために、「帝国と仏教」という新たな問題系を提起した（『帝国と仏教』『日本思想史学』四三号、日本思想史学会、二〇一一年）。この問題系の下、〈近代仏教〉〈アジア〉〈戦争〉の関連を検討し、トランスナショナル・ヒストリイ的な帝国史研究という視点から、近代仏教史を描き直すことを提案した。では、そうした研究視点がどのように成り立ち、また、近代仏教研究ならびに新仏教研究に適用できるのかを、〈アジア〉と〈戦争〉に関する先行研究を検討することで考えてみたい。

日本の近代仏教と〈アジア〉との関わりは、東アジア布教や植民地問題として研究されてきた。とくに二〇〇〇年代以降、この領域に関する研究の進展は目覚ましい。しかし、重要なのは、その関係を問う研究視点であろう。一九九〇年代以降の新

しい植民地研究としての帝国史研究（駒込武）を援用することで、近代仏教のトランスナショナルな帝国史研究を構想できるのでないか。その際、日本人仏教者のアジアへのまなざしとそれに対する現地の仏教者の反応、植民地での布教政策にはらまれた内部矛盾、日本人仏教者と現地仏教者とのインターフェイスに生ずる諸問題、東アジア布教を経ての「日本仏教」というカテゴリーの構築過程の検討など、「さまざまな次元での相互作用」に着目することが重要である。

また、日本の近代仏教と〈戦争〉との関わりは、市川白弦『仏教者の戦争責任』（一九七〇年）を嚆矢とし、現在に至るまで多くの研究成果がある。「近代仏教と戦争」の関係を考える時、それは平和をめざす個々人の心の問題であると同時に、平和な社会秩序構築の問題でもあり、それへの仏教の関わりが問題となる。ここから、「仏教と社会倫理」の問題系が浮上し、Engaged Buddhism 研究へ接続する。その際、仏教を含めた宗教の社会的機能として、現実を正当化する機能と批判する機能が分析の対象となる。また、戦争に対する仏教者の言説の社会的・政治的機能を考える際、言説を社会に媒介するメディアに注目すべきであろう。この点で、『ラジオの戦争責任』（二〇〇八年）を著し、ラジオというメディアを通じて、「近代仏教と戦争」の関係を問い直した坂本慎一の研究の意義は大きい。

最後に、梁明霞の「中国仏教史における日本新仏教の影響——『海潮音』、『南瀛仏教』を中心に」（『東アジア仏教研究』八号、東アジア仏教研究会、二〇一〇年）に注目したい。梁は、境野黄洋、渡辺海旭、高嶋米峰、加藤咄堂、加藤玄智、井

上秀天ら、新仏教徒の論文が漢訳され（あるいは日本語のまま）、『海潮音』、『南瀛仏教』等の中国・台湾の雑誌に掲載されたことを紹介している。新仏教徒と中国人・台湾人仏教者との直接的な相互作用が分析されているわけではないが、新仏教徒たちの言説の受容と流用（appropriation）、その言説の社会的・政治的機能が分析されている。梁は、『南瀛仏教』と『海潮音』にそれぞれ掲載された境野、加藤咄堂執筆の仏教の戦争観を分析し、戦争遂行の正当性、抗戦のための正当性のメッセージとして、二人の論文が戦略的に流用されたことを明らかにしている。つまり、新仏教徒たちの言説は、雑誌というメディアによって、〈アジア〉と〈戦争〉に密接に関わっていたことが、梁の論文から浮かび上がってくるのである。

今後、〈近代仏教〉（〈アジア〉〈戦争〉）の関連を主題化したトランスナショナルな研究の進展が期待される。そして、こうした研究の進展が、一九世紀以降の世界同時多発的な近代仏教の成立と展開を明らかにするための重要な役割を果たすことになるであろう。

### 東アジア世界に対する新仏教徒の視線

高橋 原

近代日本の教団仏教が帝国主義・植民地主義の先棒を担いで戦争に協力したと批判されてきたが、日本が帝国主義へと大きく舵を切ったのと同じ時期に、教団仏教への批判・改革運動と

して始まった新仏教運動が帝国主義にどう向かい合い、東アジアにどのような視線を向けていたのか。本発表では、こうした関心をもって新仏教運動の機関誌であった『新佛教』（一九〇〇―一九一五）の誌面を分析し、そのメディアとしての性質に光を当てる。

まず、運動の中核的メンバーで欧米に長期間滞在していた渡邊海旭、鈴木大拙、杉村縦横など以外にも、新仏教運動への参加者の中に印度・中国・朝鮮への渡航者や長期滞在者がいたことを示し、運動が単なる国内的な文化運動を超え出る視線を内包していた可能性を指摘する。本発表では、北條太洋（新民府、琿春などで領事）、豊田孤寒（山東省済南府優級師範学堂教授）、清水友次郎（大連高等女学院教授、南満会社交渉局翻訳事務嘱託）といった、植民地行政・教育の当事者達や、峯旗良允（浄土宗僧侶、吉林府師範学堂教習・両級師範学堂教習）、太田覚民（ウラジオストク本願寺布教所主任）といった植民地布教に関わった人物達も、広く運動への参加者に含めて考えることにする。

言説空間としての『新佛教』のトランスナショナルな性格が示唆されるが、では誌面においてどのようにアジアが表象されているかという点、貧しく文化程度が低く啓蒙が必要な民衆、墮落した朝鮮仏教といったステレオタイプのイメージの再生産にとどまっていることが見てとれる。そこにあるのはアジアの文明化が日本人の天職であるという文明の側からの視線であり、記述内容に『新佛教』ならではの独自性を見出すのは難しい。